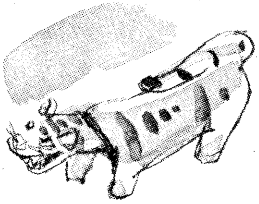
育児生活をかえりみて



清水美代子

私が家庭生活に入って、子どもの養育に専念するようになってから、すでに二十数年の歳月が過ぎようとしている。子どもの半数は、二人、または三人の子どもの親になっている。残りの三人も結婚適齢期に入ってしまった。そして私は、思いもかけなかった幼児教育の場に足を踏み入れ、明け暮れ、自分が母親として過ごした生活を、反省する羽目になってしまった。二十年も過ぎると記憶は浄化されて、美しい思い出になるはずのものなのに、育児だけはそうはいかなかった。私にとっても、子どもにとっても真剣に生きた生活の場であるから、昨日の事のような生々しさでよみがえることもある。それに親となった子どもたちからは、身近なことだけに、今日の教育観も加えて、痛い反省と、取り返しのつかない後悔を与えられることもたびたびで、いい加減にできない現在の仕事に対する責任に思い及ぶのである。

若い人たちが子どもを育てている姿を見ると、心から〝がんばれ〟ともいいたくなるし、美しいとも思う。そしてやっぱり女の人のする事の中で、一番やりがいのあることであり、女の人が一番人間として成長する時だとも思う。そして今の私は、子どもによって育てられたとよく思うし、友だちに会うと、子どもの成長と共に、女性は成長するのだということを、たびた

び感じさせられる。

しかも私はこのほかに、仕事を通して私自身がどんなに多くの恩恵を幼児教育の場から得たかということに思い当たるので、無事に成人した子どもたちの養育について、大きな助けをしてくださった場を思い返して、感謝の念をささげたいと思う。

幼稚園

私は、一度やめた教職の場に、健康上の理由で復帰し、それが大東亜戦争に続いて、とうとう三人目の次女が一歳半になる終戦の翌日まで続けた。この間、母と、戦場に主人を送り出した妹に、二人の子どもを託して、次女の生後は三人を託して、何の心配もなく職場に出た。母と子どもたちは早くから妹の所に疎開していたが、私と、早くから徴用を受けて軍事工場に出ていた主人は、次女が産まれて、いよいよ空襲がはげしくなってから郷里に帰った。その時長女が〝お母さんがいなくても忘れないように、毎日写真を見ていたの〟とアルバムを見せてくれた時の、母や妹の配慮に対する感謝と、長女の語り声を今もはっきり覚えている。

こんな時代でも、郷里の四日市市ではまだ幼稚園を開いていて、長女は、二十分ほどかかる所にある園に通うようになった。空襲に会う三カ月ほど前だったが、この事で主人のいない妹の家庭は、規則正しい一日のスタートをすることができ、今まで心配性の母からあまり外に出されなかった長女は、二十分ほどの通園で、その間に接する社会のいろいろな物に気づいて、目に見えて成長した。朝は乳母車に残る孫をのせて送る母も、途中に顔み知りができ、長女の友だちづくりに一役を果たしてくれた。ところがある日幼稚園から長女が一人で帰って来たことがあって驚かされた。今の私ならば、ふっと弟や、いとこや、祖母との事が思い出されて帰ったのだろうと原因を考えて連絡をとるのだが、家中大騒ぎしてわがままを叱ったりしたのだった。

行き届いた祖母に育てられた長女は、今でも甘えん坊であるし、長女ならぬ私も、同じような甘えん坊である。幼いころの育児とはこんなものかと、私には厳しかった母の、本質的な人のよさを、今にして思うのである。長女が幼稚園に通い出してからは家中が幼稚園の歌を歌うようになった。子どもたちにはすでに童謡のレコードを買っていたが、それよりも幼稚園の歌を母が孫たちと好んで歌うようになった。以前から私は、幼稚園に子どもが入園する時が、家庭に音楽の入る一番自然な機会として大切に考えていた。しかし現在は状態が変わって、音楽

はテレビ、ラジオ、レコードを通して早くから家庭に入って、その影響で子どもたちは早くから歌うようになっている。しかし、直接に先生から教えられて、友だちと一緒に歌うという、人と人のつながりの中での営みは、ここで始まり、全くに異った意味を持っていると思う。

これが教育音楽であり、そこに子どものものとしての意義があるので、友だちと一緒に歌う喜びを感じさせる方法、好きだった歌がもっと好きになる扱い方、子どもの成長と共にだんだん美しく歌える喜びを知らせるかかわり合い、さらに自分の心に触れる音楽がコマーシャルソングや、テーマソングのほかにあること等々。教育的な立場から見た結び付きが、ここからスタートするものとして、〝音楽リズム〟が大切な意義をもっていると思う。

長女は幼稚園から帰ると、友だちの名前を口にするようになった。お使いの行き帰りに、母は孫からその家を教えられて、いつの間にか知り合いになったりして、その社交性に驚かされた。長女の話から顔も見ない友だちを話題にもした。子どもの通園から母親もまたそこでいい友だちにめぐり会うことがたびたびで、何人も子どもを育てた私は人さまより多くの幸いにめぐり会った。友だちがはっきりしてくると、次に母は孫を他の友だちと比較することを始めた。当時の私は全く第三者的な立場に立ってよく母をとがめた。理屈ではわかっていても、人と比べて遅れているといい気がしないのは人情で、私は時々母を見ていて、このひたむきが子どもを育てるのに必要なのでないかと、自分を反省することがあった。けれどその後、子どもたちを育てた時、やっぱり同じような失敗をしたこともあり、母の事を思い合わせて汗顔の思いで反省したものだった。

空襲を受けて移った主人の実家の近くには、私立の幼稚園があった。長女はもちろんすぐにそこに入園した。そこで長女は友だちからいろいろの遊びを学んできた。まず縄飛びを始めた。腰ひもで、根気よく飛んだ。まりつき、お手玉、毛糸編みと次次習ってきた。これらの遊びは、私が幼い時、やっぱり遊んだもので、田舎にはまだそんな遊びが残っていた。子どもたちにとっては、近くに田畑もあり、友だちもあり、思い切り遊べる幼稚園もあり、焼けて傷心のおとなと関係なく、大変楽しそうに過ごしていた。

長女の小学校入学を機会に、名古屋に帰った。ここで長男は、少し離れた師範の附属幼稚園に入園できた。十二月生まれではあるが、幼稚園に行ってみると、長男は特に幼く見えた。一直線の道は、途中に踏切りがあり、長い坂道があり、申し分のな

い通園路だった。初めは坂の上まで送った。足の弱い長男はこの坂を長くかかって歩いた。一人で通うようになってからもつらかったらしく、泣き泣き登って行ったと、その近くにお住いの友だちのお母さんから、時々ご報告をいただいた。そのおかげで、長男は二年間にやっと人並みの脚力と、体力をつけた。どんなに工夫しても、毎日自然についていく体力を、おとなの力でつけることは不可能だったと思うし、それにつけても、戸外遊びの少なかったわが子の成育歴に、大きな欠陥を思った。

毎日の生活から得られるものが、どんなに大きな役割りを果たしているか、戸外遊びを充分にすることが子どもの体力をつけるのに、どんなにか大切であることを、私は自分の体験を通して知っている。そして、子どもの行動力は、案外と脚力に左右されるのでないかと、長男を見ていて思った。それから、私は、子どもたちをよく外に連れ出して歩かせた。近所の人からも、そのことについては感心もされたし、ずいぶん離れた所の停留所で、知らない人から〝いつもたくさん子どもさんを連れていらっしゃる方ですね〟と声をかけられて驚いたことがあった。乳母車に一人を乗せ、そのそばに何人も連れて歩いている私の姿が、そんなに人目を引いているのかと、複雑な気持ちだった。そのおかげで、慣れていることも手伝って、それからの子どもたちは、最初から兄の泣いて通った道を、元気に、途中で友だちをさそっては、しかも、友だちをはげまして連れて行ったと、感謝されたこともあった。この経験から、私はどこの子どもの家に行っても、まず孫を外に連れ出すことを第一にしている。歩き出すと子どもは実に外に出ることを喜ぶ。途中犬や猫に会う事から始まって、〝自動車〟〝バス〟〝お花〟と呼称しつつ、歩く子どもたちの生命力が、つないだ手から伝わって来て本当に楽しい。二歳未満の孫が一時間以上も歩き続けて驚いた。疲れると休憩をしながら歩くのである。草をつんだり、お茶を飲んだり、車をよけることのほかは、子どもたちに何の悪い影響を与えるものもない散歩道を選んで歩く。そんな時、つくづくと武蔵野を感じて、私自身も楽しんでいる。

毎日のように、次女を追って泣く三女は、三年保育のある幼稚園にお願いした。それが、途中で友だちをさそって通園した子どもで、その強さは、一年間友だちと一緒に生活した幼稚園から受けた送り物である。こんなふうにして、私が子どもを育てる中で、幼稚園は大きな支えでもあり、子どもたちが無事に育つことのできた恩人でもある。長男の所では、三人続いてできた孫を、次々三歳保育に出すことにして今年は長男を出した。経済力の低い若い両親は、相当苦しいようだが、子どもが目に

立って成長することを喜んで、幼稚園に出してよかったといっている。私は、〝苦しい思いをしてこそ、したという実感が強いから、がんばって〟といってはいるが、教育はお金のかかるものという常識を、幼児期だけははずしてほしいと思う。

幼児教育の重要さは、まずどの子もが、友だちと、遊ぶ場と、玩具と、それを見守る子どものよくわかるおとなが受け止めてくれる場のあることで、両親はその人からいろいろのアドバイスを受けながら、一番望ましい協力を子どものために惜しまないことだと思う。保育者の働きやすい環境から、子どもに暖かい配慮が生まれてくる。正しい判断と、両親への正しいアドバイスは、保育者の勉強できる環境から生まれてくると思う。いずれにしても私は、幼稚園があったことで、本当に助けられた。現在私と同じような思いで、幼稚園に子どもを出している親も何人かいることと思う。

育児書

終戦と共に家庭に入った私は、その十一月、母をなくした。今まで母や妹に世話になっていたので、何もかも不安だった。衣、食、住のことは、結婚して三年ばかり実際にしているのであまり気にならなかったが、子どもたちの教育については、全く不安だった。泣く子どもが何を伝えているかもわからなくて、一緒に泣きたくなることもあった。第一、子どもに話の通じる言葉のむずかしさに驚いた。しょうがないので、やっと出て来た本を頼りにした。当時の本は全く悪い紙質のものだった。戦後の育児書は等しく〝子どもの自由尊重〟と〝叱らない教育〟について書いていた。

子どもたちは母と妹の行き届いた教育で、割合いおとなが扱いやすい子どもたちだったが、三人寄れば予想外の事件続出で、〝叱らないで〟〝自由を尊重して〟と自分にいいきかせていても、大声をはり上げることの方が多かったように思える。多忙な間に読む本は、アメリカの訳本が多かったのだろうか、事例が少なくて、むずかしかった。落ちついて、判断しながら行動するゆとり等ないので、〝叱らないで〟と自分をおさえていると、かえって私の方が精神不安定になってしまう。もう自分流の育児法でいくことにしようと思うと、自分の親のした事がいろいろと思い出される。親が自分によくいい聞かせた言葉がつい口に出る。それが子どもに通じない原因であることに気がついたりもした。

こんな中で私は〝婦人の友〟の再出版を知り、羽仁もと子先生の家庭教育論を知って、いろいろと助けられた。波多野先生

の〝幼年期〟の出版もあって、どこの母親も同じ思いをしているという安心感を得て落ちついたことも思い返すのである。〝婦人の友〟は女学校の家庭科の先生の推薦書で、私は卒業してからすぐこの本を読んでいろいろのことを教えられてきた。それにしても、母から叱られることの多かった私には〝叱らない教育〟が人一倍むずかしかったのだと思うが、いつの間にか、叱る時は叱り、腹の立つ時は怒り、世間普通の母親になって、私なりにこの生活に生きがいを感じていたのだと思う。それでなければ、こんなにたくさん育てる気にならなかったと思う。いずれにしても、子どもを正しい人に育てたいと思う心は、母親の祈りでもあるし、それに向かって努力するのは自然の姿でもある。ただ父を早く亡くし、厳しく育てられた私にとっては〝叱らない教育〟はいまだにあこがれでもある。幼稚園が私の育児にとっては大きな助けであったように、その当時の育児書は私の大切な支えであった。

アドバイス

私の子ども好きなことは、女学校の時に教えてくださった国語の先生の影響ではないかと思う。その先生は、〝良寛さま〟〝一茶〟のことを、実に熱心に話してくださって、強く心を打たれたことを今でもよく覚えている。しかし実際に年の近い子どもを何人も持ってみると、思いのままにはいかなかった。だから私はたびたび幼稚園の先生に相談にうかがった。あまりに事件が続出するので、子どもの落ち着きがないという考え方に結びつけて、児童相談所にうかがった。そこで先生は〝わたしは何をあなたにいったらいいのですか〟という意味のことをいわれた。その時私は自分が落ち着きを失って、子どもに眼のとどかない事に気づいた。それ以来、自分のことは、自分で処理しなければと、励ますことができるようになった。しかし、自分の考えが定まらない時は、とにかく学校に出向き、あるいは相談する場を見つけて、自分の考えを正してみることをしてきた。もちろん今でもその先生は、お元気でもいらっしゃるし、子どもが無事に成人したことをご報告して感謝した。いいアドバイスとは何であるかということを教えていただいた恩人と思っている。

先　生

私はよく、子どもたちがお世話になった先生方を思い出してなつかしむ。本当によくお世話してくださったと思う。先生は絶対のたよりだった。どの先生の所にもよく通ってお話をうか

がった。家で手がまわりかねて、どの子も先生方に格別にご迷惑をかけたと思う。子どもたちは、学校の先生のほかに、画とか、習字だとか、音楽とか、いろいろの先生にもついた。主人は私に〝教育ママ〟というレッテルをつけたが、そこに誠意をもって導いてくださる人があるということと、幼い子どもたちに、そんな人の愛情や、誠意に触れさせることが願いだった。こんな場では一対一のかかわりがあることを思ってもいた。私は小さい時から先生が大好きだった。小学校の初めから、父をなくした私は、どの先生からもかわいがられた思い出が多い。学校も大好きだ。母も私の願いを入れて思い切った教育を受けさせてくれた。

だから、私は教育に対する不信感を持てない人間である。子どもたちもできるだけ学校に送った。日本人の教育熱心は、過去の先生方の愛情に支えられた思い出を持つ親の信頼感から出発するものでないかという考え方を、私は今も持っているのである。そして私は子どもが成人したこのごろ、その思いがたしかに実っているように思うのである。私の子どもたちの最後に選んだ勉強は、音楽であり、美術であり、習字だった。精いっぱいに生きていた私のまわりにはそんな家庭的な要素はあったとも思われないし、私はそれを目的として考えたこともなかった。ただ兄や姉に手を引かれて、出かけた先に、一人々々を受け止めてくださった先生があった事だと思う。私は母から勉強勉強といわれて育った。しかしそのかたわらに、お琴、お花、お茶の勉強も用意されていた。私は子どもに勉強とはいわなかった。させようと思って机の前にすわると、側から本を破り、落書きをする妹が現われて、悲劇に終わるのが常識だった。そんな中で、どの子もどの子も勉強をしなかったが大した事ではなかった。

私は今、何のめぐり合わせか、幼児教育者を育てる仕事をする羽目になってしまった。そして一番思うのは、子どもを育てていたころの母親の心境である。それに答えられる先生を出したいと思う。私の受け持つ教科は〝音楽リズム〟である。積み重ねの少ない生徒を前にして思い悩むことが多い。しかし私の子どもに示してくださった、一対一の暖かい指導でそのむずかしさを乗り切ろうと思う。幼児期の教育が人間の一生にとって、どんなに大切なものかを、子どもを通して知っている私のすることは〝音楽リズム〟を通して知る喜びを正しく伝えることのできる先生を、一人でも多く育てるということである。与えられたこの場で、私はお世話になった先生方への、感謝の一端を果たすことができたら、これにまさる喜びはないと思う。

（市邨学園短期大学）